

認知障害のある高齢者に対する 顔と名前の記憶訓練の効果 -multiple baseline designsによる検討-

能登真一¹⁾・二木淑子²⁾・笠井明美³⁾・皆川陽子³⁾

- 1) 新潟医療福祉大学
2) 金沢大学
3) 介護老人保健施設 尾山愛広苑

【はじめに】

顔の認知や名前の記憶は、人が社会生活を進めていく上でとても重要な機能である。臨床場面においても、セラピストの名前をなかなか覚えられない対象者が少なくないことやそういう方々の訓練に難渋することをしばしば経験する。我々は、ある介護老人保健施設で行った先行研究において、施設スタッフたちの顔や名前の認知が良いほど、ADLを含めた日常における行動のレベルが高いことを確認した。今回はその先行研究の結果をもとに、顔や名前の記憶をうながす認知訓練を行い、その効果を調べた。

【目的】

認知障害のある対象者が errorless learning paradigm を用いた顔と名前の記憶訓練によって、それらの記憶が可能かどうかを見極め、さらにはその効果が行動面にどのような影響を与えるのかを multiple baseline designs で検証することである。

【方法】

対象者は新潟県内の介護老人保健施設に入所する女性3名で、プロフィールは以下のとおりである。

S1: 83歳。左視床出血 (H12) . MMSE19/30. RBMT10/24.

S2: 65歳。くも膜下出血 (H7) . MMSE21/30. RBMT10/24.

S3: 89歳。脳梗塞 (H12) . MMSE14/30. RBMT2/24.

記憶訓練は、errorless learning paradigm のもと、顔写真を提示した上で個人情報を与えながら、性格判断などで意味処理が行われるようにアプローチした。ターゲットはレクリエーションプログラム (レク) の担当セラピストとし、彼女が担当する週1回のレク前に別のセラピストが訓練を行った。

訓練の効果は、ターゲットの顔についての判断、同定、命名の3レベルの可否と、レク場面における対象者からターゲットに対する自発的会話の頻度によって判断した。あわせて、対象者から他のレクメンバーに対する自発的会話の頻度も調べた。Single case design は3人の対象者間の multiple baseline designs とし、ベースライン

期、介入期、フォローアップの3期で検討した。統計的手法は各期間の差を t 検定によって求めた。インフォームドコンセントは今回の研究の目的と方法等について、対象者を含むレク参加者全員とその家族に対し書面による説明を行い、同意を得た。

【結果】

顔と名前の記憶について、ベースライン期には S1 と S2 が判断のみ可能、S3 がすべて不可能であった。しかし介入期後半には S1 が判断・同定可能 (ときに命名も可能)、S2 が判断・同定・命名可能、S3 が判断・同定可能 (ときに命名も可能) となった。

行動面では、3人の対象者すべてでベースライン期に比べ介入期においてターゲットに対する自発的会話の頻度が増加した。統計学的にも、t 値がそれぞれ S1: -4.514 ($p=0.001$)、S2: -5.462 ($p<0.0001$)、S3: -5.445 ($p<0.0001$) となり、すべての対象者で有意な差を認めた。フォローアップにおいても、ベースライン期に比べて会話の頻度が増加していた。また、他のレクメンバーに対する会話の頻度は大きく変化しなかった。

【考察】

Clare ら (2002) は Alzheimer 病患者に対する errorless learning paradigm を用いた記憶訓練でその効果を報告している。今回の我々の研究でも、認知障害のある対象者に対する顔や名前の記憶が週1回の訓練でも可能となり、その効果を裏付けている。また、ターゲットへの会話頻度の増加という行動面の変化は、認知訓練の効果が日常場面において行動の変化として表れる可能性があることを示唆している。一方、顔の記憶に関しては、心理学の分野で示差性効果や意味処理優位性効果などが指摘されている。今後、意味処理過程を考慮した訓練を認知訓練の一部として系統化していればその効果がますます期待されるものと考えている。

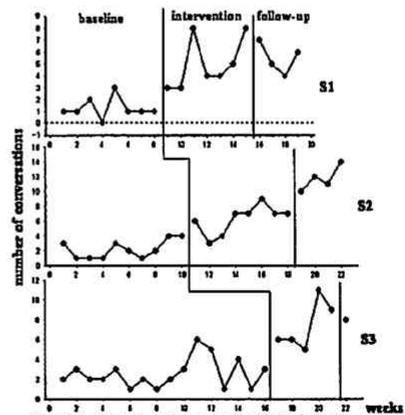


図3 3例におけるターゲットへの自発的会話の回数

Key Words: 記憶訓練 認知障害 (シングルケースデザイン)